“人間と性”
一般社団法人“人間と性”教育研究協議会
〈性教協〉会報 No. 392　2024.5.25
発行：“人間と性”教育研究協議会/発行責任者：北山ひと美
〒151-0071 東京都渋谷区本町1-7-16 初台ハイツ1006号
https://www.seikyokyo.org　Tel 03（3379）7556

視点

逢ひ見ての のちの心にくらぶれば 昔はものを思はざりけり

今年のNHK大河ドラマは、源氏物語の作者である紫式部を主人公にした物語である。今から1000年も前の平安時代に、貴族たちにより多くの歌が詠まれ、漢詩や日記や物語なども書かれていて、「富の集中は文化活動を促すのか」と小声でぶつぶつ言いながらも、その文化の高さに感心しながらドラマを視ている。標題の歌は紫式部より50年ほど前に活躍した権中納言敦忠（藤原敦忠）が詠んだもので、「恋しい人と逢瀬を遂げた後の恋しい気持ちに比べたら、それ以前はまるで何も考えていなかったようだ」という意味の歌で、小倉百人一首に選ばれている。

これは恋の歌だが、私にとって性教育（性教協）に逢ったら、それまでの自分が本当にものを考えていなかったと思えるという意味で、強く共感する歌なのである。性の学びで目を見開かれたことが沢山ある。例えば、月経があり男性として暮らしている人にとって、男性トイレにサニタリーボックスがないのは不便であることや、月経関連グッズに黒やグレーのものも欲しいと思っているということを、学びを通して知った。こういう時に、思わず「昔はものを思はざりけり」と膝を打つのである。「人工妊娠中絶に対して、同情するようなケアはしない」という考え方に触れた時もそうだった。そもそも妊娠は自在にコントロールできるものではない。自分と相手の身体の科学を知り、妊娠機序を学び、避妊方法を選んだ上の性交であっても妊娠することはある。その時、よく考えた上で人工妊娠中絶を選択するとなったら、病院でその処置にあたる者は、本人の選択を支持し、対等な立場で粛々と処置にあたりたいという考え方に触れ、人の尊厳を大切にしているなあと感心して、これにもまた膝を打った。

このように気づきをもらった目で見ると、周りに気になることが実に沢山ある。行政機関の「男女共同参画課」の看板を見て、世の中は男女だけじゃないのにと思い、「女性の社会進出」と聞くと、女性の存在なしに今まで社会が回っていたと思っているのかと突っ込みたくなる。結婚で早く引退した某女性芸能人について、同じく芸能人である夫を支えて、ずっと家にいて表舞台に出ないということを、メディアが美談のように語り続け、引退後40年経った今もそれが続いているという現実を見て、何気なさを装った情報で私たちは生や性の捉え方を刷り込まれているのではないかという思いが湧く。私はそんな刷り込みに踊らされないように学び続けたいと思う。そして、目が見開かれるような性の学びの喜びを周りの子どもや大人に届けていきたい。

ちなみに小倉百人一首の紫式部の歌は「めぐり逢ひて　見しやそれともわかぬ間に　雲隠れにし　夜半の月かな」である。

中村智子
（北信越ブロック幹事／
長野サークル代表代理）